

グエムル 漢江の怪物

2006(平成18)年7月18日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★★



監督=ポン・ジュノ/出演=ソン・ガンホ/ピョン・ヒボン/パク・ヘイル/ペ・ドゥナ/
コ・アソン/イ・ドンホ/イ・ジェウン/ヨン・ジェムン/キム・ロハ/パク・ノシク/イ
ム・ピルソン (角川ヘラルド映画配給/2006年韓国映画/120分)

……韓国に登場した怪獣(怪物)は、ソウルを流れる漢江に住むグエムル。ブラックユーモア的なその誕生秘話には少し首をかしげるが、「韓国のスピルバーグ」と讃えられる36歳のポン・ジュノ監督の独創性が、あちこちにキラキラと……。何よりもすごいのは、韓流の家族愛の強さとその迫力。娘を怪物から救出するための一家あげての涙ぐましい行動力に、あなたはきっと圧倒されるはず……。

第59回カンヌ国際映画祭事情

第59回カンヌ国際映画祭(2006年5月17~28日)は、5月17日の『ダ・ヴィンチ・コード』(06年)のワールド・プレミアで華々しく開幕した。その様子は『キネマ旬報』7月上旬号(74~77頁)と7月下旬号(76~77頁)で詳しく報告されている。今年の審査員は、アジア初のウォン・カーウエイ監督を委員長とする9名で、イタリアのモニカ・バルッチや中国の章子怡チャン・ツイイーという有名な女優もその中に入っているが、「結果として、芸術性よりも政治的な主張の強い映画が優位になったように見える」らしい。したがって(?)、残念ながらこの2冊の情報による限り、私が知っている作品はゼロ。また、日本からの出品はコンペにはなく、「監督週間」に西川美和の『ゆれる』(06年)、「批評家週間」に中野裕之の短編『アイロン』(06年)の出品のみ。そして韓国も、「ある視点」に兵役体験を基にした新人ユン・ジョンピンの『許されざるもの』(06年)と「監督週間」にこの『グエムル 漢江の怪物』(06年)の2本の出品だけ。そして、受賞作は日

本も韓国もゼロという寂しさだった。

しかし、この観客の度肝を抜くような怪獣（怪物）映画にカンヌ国際映画祭は衝撃を受け、ニューヨーク・タイムズは「今年のカンヌ国際映画祭で最高の映画だ!」と称し、そして弱冠36歳の奇才ポン・ジュノ監督を“韓国のスピルバーグ”と讃えたとのこと。地味な作品が多かった中、映画祭の観客や審査員たちがこの『グエムル 漢江の怪物』の突出した面白さにビックリし、強く印象に残ったのだろう。そして、それは私も全く同じ……。

ポン・ジュノ監督とは？

1969年生まれのポン・ジュノ監督は、1995年に韓国映画アカデミーを第11期生として卒業した後、創作活動を開始。『ほえる犬は噛まない』（00年）、『殺人の追憶』（03年）で韓国はもとより日本や世界で認知される監督となった、まだ36歳の若手監督。

『殺人の追憶』のような社会性のあるシリアスな作品が好きなのかと思っていると、今度は、韓国人はもとより全世界の人々の度肝を抜くような怪物グエムルを創造するとともに、いかにも家族の絆を大切にする韓国人らしさを前面に押し出す風変わりなストーリーをつくり出した。そしてこれは、すごい才能。何よりも面白いのは、その怪物グエムルが韓国の首都ソウルを南北に分けて東西に流れる、雄大で美しくすべての韓国民の心の拠り所となっている漢江ハンガンに住みついているということ。これによって首都ソウルは大騒動に……。

この映画は彼が監督のみならず脚本も兼ねているが、そんなポン・ジュノが今後どんな分野にアツと驚くような作品をつくり出していくのか、期待を持って見守りたい。ただし、日本の『ゴジラ』（54年）の「誕生秘話」が原爆の悲劇だったというストーリー性があったことに比べれば、「グエムル」の誕生秘話はちょっとお粗末……？ もう少し何か、脚本をヒネってほしかったと思うのだが……？

ある日、ある時、ある物体から大パニックが……

のどかなある日の漢江。ジャムシル大橋にぶら下がっている奇妙な「物体」を

発見したことから、その日のパニックが始まった。突然動き出したその物体は、水の中を泳いでいたかと思うと、急に陸上にはい上がり、逃げまどう人々を食い荒らし始めたから大変。しかし、中には勇敢な男もいるもの。在韓米軍のある兵士は、ひとり敢然とこの化物に立ち向かい、カンドゥもそれを応援したが、所詮かなうはずもなく、その軍人は腕をかみ切られて瀕死の重傷を負うことに……。そして、ひと暴れしたこの怪物グエムルは、せいせいしたかのようにヒョンソ（コ・アソン）を長いしっぽに巻いて捕えたまま、漢江の水の中へ潜ってしまったが……。

グエムルとはどんな怪物……？

この映画の第1の主人公はこの怪物グエムル。そのクリーチャー・デザインのコンセプトを手がけたのはジャン・ヒチュルで、怪物の外見から動作に至るまで全工程を彼が監督しているとのこと。その姿は、とりあえず「水陸を自在に行き来する、魚類と爬虫類を兼ねたようなもの」とだけ紹介しておこう。あとは実際にあなたの目でスクリーン上で観てもらい、とりわけその①大きさ、②顔や全体の形、③武器、④食糧などに注目してもらいたい。また、怪獣映画やホラー映画にいろいろと登場する従来の怪物たちと比べても、このグエムルの個性がきわだっていることは明らかで、それは韓国映画の実力を証明するもの……？

当初は、ボンヤリとしかその輪郭を見せないグエムルも、物語が佳境に入るにしたがってそのリアルな全貌を開示してくるから、よく注目してみよう。とりわけ、下水道の中に閉じ込められたヒョンソとグエムルとの「駆け引き」の中に見るグエムルの実像は面白いもの……。

グエムルに立ち向かうパクー一家たちは……？

この映画の一方の主人公は怪物グエムルだが、もう一方の主人公はパクー一家の面々。家長のパク・ヒボン（ピョン・ヒボン）が営む小さな売店で、36歳になりながらいつも居眠りばかりしている、ちょっと頭の弱い長男がカンドゥ（ソン・ガンホ）。このカンドゥには妻がいたが、娘を産んですぐに逃げていったらしい。その娘が今13歳となるヒョンソだが、グエムルの犠牲になったのがこのヒョンソ。

グエムルの長いしっぽに巻かれて漢江の中に消えていったため、誰もがヒョンソンの死を嘆き悲しんだが……。

他方、29歳の次男ナミル（パク・ヘイル）は、大学を卒業したのに就職先が見つからず、いつもイライラしている様子。韓国らしく（?）、学生時代に反政府運動をやっていたおかげで、火炎瓶のつくり方や投げ方が今頃役立つことになったのは皮肉……。

また、長女のナムジュ（ペ・ドゥナ）はアーチェリーの選手で、パク一家の誇り。金メダルを争う大会の日にグエムルが現れたのは皮肉だが、かわいい姪っ子を救うためなら、女だって引っ込んではいない。銅メダルを獲得したその腕前で、敢然とグエムルに立ち向かったが……。

ウイルス騒動は喜劇風に……？

こんなパニックに対応するのは、日本ではまず警察、それでダメな場合は自衛隊だが、韓国では徴兵制にもとづくれっきとした軍隊がある。しかし、今回は在韓米軍の兵士が重傷を負ったうえ、何か新種のウイルスが原因と思われる奇妙な発疹症状が現れたからさらに大変で、アメリカ軍の動きも急……。韓国政府はアメリカ軍の発表を真に受けて（?）、グエムルは感染者を死に至らしめるウイルスの宿主だと発表し、グエムルに襲われた人々を強制的に隔離した。すると、勇敢にも（無謀にも?）グエムルと闘ってその返り血を浴びたカンドゥは、最も危険なウイルス保持者……？

真面目にこんな科学論争を追及していくのもひとつのやり方だが、36歳の奇才ポン・ジュノ監督は、こんなウイルス騒動を喜劇風に描いたところがこの映画のミソ……。

また、強制的に病院に隔離されながら、何度も病院から逃げていくウイルス保持者（?）のカンドゥを、あの名優ソン・ガンホに演じさせたのがこの映画のポイント。映画冒頭のブラックユーモアのような導入部を含めて、グエムルという怪物誕生秘話と、そのウイルス被害をめぐって韓国政府と在韓米軍が右往左往するところが、本当は笑ってはダメな問題なのだが、思わず笑いを誘うもの……。そして、これこそが韓国映画の実力……。

やはりケイタイがポイント

ヒョンソがグエムルにさらわれて死んでしまっただけでは、何の面白みもないことは明らか。この映画が面白いのは、ヒョンソ救出のためにパク一家が総力をあげてグエムルと闘うこと。もっとも、そうなるためにはヒョンソの生存が確認されなければならないが、それがわかるのはやはりケイタイ。なぜヒョンソからカンドウのケイタイに電話がかかってきたのか？ かけることができたのか？ それは映画を観てのお楽しみだが、今ドキの映画ではやはりケイタイが重要な小道具となることが多い……。

ペ・ドゥナの新しい面が……

父親カンドウのヒョンソ救出に向けた執念はすごいもので、まさに火事場のくそ力……？ 金髪姿になったソン・ガンホの熱演はいつものようにすばらしいもの。そしてまた、家長ヒボンも次男ナミルの演技もさすが。しかし、私が今回特に注目したのは、『TUBE チューブ』（03年）、『春の日のクマは好きですか？』（03年）、『リンダ リンダ リンダ』（05年）と3本観たペ・ドゥナの、ちょっと変わった凛々しい（？）姿。1979年生まれだから、もう27歳になる彼女は丸顔で童顔のために、フワツとした掴み所のない役柄というイメージが強かったが、この映画ではアーチェリーの銅メダル獲得にみられるように、集中力の固まりのような、パク家では最もしっかりした女性を……？ したがって、セリフは少ないものの、要所要所でポイントをあげているし、最後には決定的な役割を……。そんな彼女に是非注目してもらいたい。もっとも、イメチェンのためか、今までの短い髪から長髪（パンフレットではウェービーなヘアスタイルと書いてある）にしているが、それが似合っているかどうかは別。だって、彼女はもともと美人系ではないから……？

韓国の少女は13歳でもしっかりしたもの……

私がもう1人注目したのは、パク家の13歳の孫娘であるヒョンソ。このヒョンソを演ずるのは、本作でスクリーンデビューした1992年生まれのコ・アソン。ヒ

ヨンソは最初の間はかわいい制服姿を見せてくれるものの、グエムルにさらわれた後は終始汚れ役で、懸命にグエムルと格闘(?)することを余儀なくされるが、その勇気と機転は大したもの。次々と送り込まれてくる犠牲者からケイタイを捜し出し、さらに生存していた男の子を守りながら、最後までグエムルと闘う姿は感動的……。そして最後には……？

そんな彼女をポン・ジュノ監督は、「コ・アソンは確かに若いですが、私は彼女を子役とは呼びません。彼女はまさに“女優”なのです」と述べているが、今後の彼女の成長に要注目！ 今ドキの軟弱な日本では、ひょっとして大学生でも彼女並みの行動をとれないのでは……？

韓流の家族愛の迫力は圧倒的！

日本人も結構、熱しやすく冷めやすい民族だが、熱しやすいことにかけては韓国人は日本人の数倍上……。したがって、前半面白い(?)のは、グエムルによる被害者たちの合同葬における遺族たちの迫力満点の嘆き悲しみよう……。そして、この映画の中に一貫して流れているのが、韓流の強い家族の絆と家族愛。つまりグエムルに奪われたヒョンソを助け出すために自分たちが指名手配されることも厭わないうえ、グエムル退治のためには勝敗を度外視して(?)全力で向かっていく姿勢は、すべてこの家族愛にもとづくもの。

もちろん肉親への愛情の深さそのものが民族によって異なるわけではなく、私がかここで言いたいことは、その表現の仕方が外向きか内向きかということ。そして、韓流はそれがトコトン外向き……。泳げないクセにグエムルを追って漢江の中に飛び込んだり、何の作戦もたてないままむやみやたらとグエムルに向かっていくカンドウの姿を観ていると、あなたもそれを実感し、その迫力に圧倒されるはず……。

2006(平成18)年7月20日記